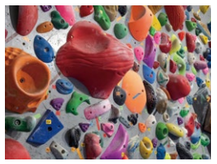
「障がいがあっても、輝ける世界がある」――。そんなパラスポーツの魅力を郷里から伝えたい。

競技人生の始まりは、自宅の木登りから。ボルダリングの魅力に取り憑かれて楽しかった壁登りが事故で潰えた、と思われた。今は、片手での挑戦。両手で登っていた課題は登れない。目の前の壁を睨みながら、自分なりの登り方を模索した。一つひとつの課題を克服し、障がいを抱えて挑んだ世界で待っていたのは、ワールドカップの金メダル。頂からの景色は、右手の感覚を失う前には経験したことのない輝きがあった。

大沼 和彦さん

パラクライマー



子どもの頃から木登りが好きで、実家の庭にあった木によく登って遊んだりしたんですよ。ワンパクで、よく叱られました（笑）。大工になりたくて工業高校へ進学して、部活は山岳部。クライミングに特化した、県内では珍しい部活で、毎日のロープクライミングでの練習が今のパラクライミングに生きています。

卒業後、大工の職に就いたのですが、二年で退職。しばらく派遣で仕事をしながら、「きちんと資格を身につけて人のためになる仕事をしよう」と決めて、看護専門学校へ進学しました。ボルダリングは趣味で続けていて、ジムなどに定期的に通いながら、充実した学生時代を過ごして、年が明けたら、いよいよ国家試験。事故に遭ったのは、そんな秋の頃、バイク仲間とツーリングをしているときでした。病院のベッドで目が覚めて右腕の感覚がないことに気づいたとき、事態を理解しましたが、何があったのか、事故当時の記憶は今も欠けたままです。

退院後、「もうボルダリングもできないな」と思いながら、それでも壁を見たくなるんですね。通っていたジムに足を運んで、事故後初めてホールドに触れた時の感覚は、言葉では言い表せません。胸を突かれたというか。もうできないという気持ちより、怪我をしていても登れるかも、と気づいた瞬間でした。

「パラクライミング」があることを教えてくれたのは、事故を起こしてしまったツーリングに同行していた仲間です。定期的に開かれている障がい者向けのイベントに同行してくれて、ずっと支えてくれました。長く親しくしている高校の山岳部の先輩が笠間にこのジム（ボルダリングジムｖｏｒｔｅｘ）をオープンして、来店される人たちにクライミングの楽しさなどを伝える機会を与えてくれたのも、励みになりました。

パラクライマーとして競技に参加する決意をしたのは、平成三十一年（二〇一九年）の二月。事故から三年後の冬でした。

令和四年（二〇二二年）六月のパラクライミング・ワールドカップ（W杯）に出場することが決まったときには、ジムで知り合った市職員の方が非常に喜んでくれて、笠間市のスポーツ奨励金の制度を紹介してくれました。スポンサーのない選手は渡航費なども自費になるので、この制度はありがたかったです。そのW杯で初優勝して、金メダルを持って、お世話になった方々に報告ができたのは、本当に嬉しかったです。そして何より、いつも好きなようにやらせてくれた両親に感謝したいです。

看護師の資格は事故後きちんと取得して、現在は看護師として特別養護老人ホームで働きながら、パラスポーツの普及と発見に繋がるよう、自分の姿を通じてSNSに投稿・発信しています。

実は、笠間はボルダリングやロッククライミングには適した土地柄で、ツルツルした、加工していない天然の岩壁がたくさんあります。将来、ここでパラクライミングの世界大会を開けたら素晴らしいだろうな。そんな夢を描きながら活動しています。（了）

大沼　和彦（おおぬま・かずひこ）
1986年笠間市（旧友部町）生まれ。
水戸工業高校で山岳部に所属。クライミングに魅了される。卒業後、建築業を経て、看護師をめざすが、バイク事故で右腕に障がいを負う。その後、知人のジムなどでクライミングの魅力を伝えながら、みずからもパラクライミングの競技に参加。2022年6月にオーストリア・インスブルックで開かれたパラクライミングのワールドカップに出場。男子上肢機能障害のAU 1クラス（最も障害が重いクラス）で見事、初優勝を果たした。看護師として働きながら、障害者スポーツのPRに努めている。

取材協力：ボルダリングジム vortex